

十二月の觀察

二〇

堀 七 藏

一

十二月に入つて觀察させるべきものがいろいろある。枇杷の花でも八つ手の花でも亦さ、いんぐわの花でも更に水仙・福壽草なども十一月から十二月にかけて觀察せらるべきものである。椿の蕾には葉の芽と花の芽とがはつきり分る。桐の芽も亦同様で、花の蕾は澤山房のやうについてゐるが、葉の芽は枝の先端について一才氣がつかぬ。さくらでもまたうめでも芽を觀察させるもよい。しかし芽について六ヶしいこみを説明するのではない。落葉して枯木の如くなつてゐる樹木でも本當に枯れてゐるのではないこみや、春になつて咲く奇麗な花が蕾になつて冬を越すこみや、その蕾が所謂芽で、冬の寒氣に堪えるやうに保護せられてゐるこみなぎを、説明するのではなく樹木を觀察さ

せてそれを成程に認識させるのである。多くの草は種子になつて冬を越すが、また地下莖や根に養分を貯へて翌春、それから芽を出すこも、ダリヤもか菊もか、いもなぎで直觀察せるがよい。

二

動物が冬を越す有様を觀察させるこもが出来るこ面白い。尤もこれは十一月、十二月になつて森の中を歩いたり、地面を掘つたりするこ、成程に思はれるものを見つけられるものである。蛙が土中にひそんでゐたり、蝸牛が落葉の中に埋れてゐたりするし、またいろいろの蟲の卵なぎを見付けだすものである。是等も動物の冬眠なぎを説明するのではなく、幼児が土いぢりなぎをしてゐたりして見つけたまきに觀察させるだけのこみである。

十二月になると、小鳥なぎが人家近くに多く来るから、十一月の觀察で述べたやうに小鳥を繼續して觀察させるこよい。若し雪が降れば小鳥や犬・猫・兎なぎの足あごを觀察させるのも面白い。

三

びは(枇杷)は常緑の喬木で、莖の高さは十メートルにも達するものである。葉は長大なる長い楕圓形で、鋸齒があり、下面には褐色の毛が密に生じてゐる。花は十一月から十二月の初に咲き白色である。花軸も花梗も褐色の毛が多い。單瓣花で、花瓣が五枚ある。小さな花であるが、白いで目立ち、一種のよい香がある。

やつでも秋の末に小花を球狀に開くものである。淡黄白色で、花瓣が五枚あつて雄蕊が五本ある。花が散つた後に青い實が出来、熟して黒色になる。よくやつでに花が咲かないものご誤解する人がある。

やつでは常緑の灌木で、通常庭園に栽培せられる。幹の高さ二三メートルになる。一根より幹が叢生する。葉は長い太い柄があつて掌狀に分裂してゐる。やつで、さいふから

八枚になつてゐるご思ふご誤である。幾枚もの葉について幼児に數へさせるもよい。やつでの葉は頗る大きく厚く深縁にして光澤に富むものである。葉が著しいためにやつでは葉だけご思へば誤である。花の大きな蕾が出来て苞に包まれてゐるが、苞がされて穂が出で、分岐して小花を球狀に開くものである。

なんてんは難を轉ずるものご解せられ、通常庭園に栽植せられるもので、常緑の灌木である。莖の高さは通常一メートル餘であるが、大きなものは三メートルにもなる。葉は披針形の小葉より成る數回羽狀複葉で、葉柄の基脚は葉を包んでゐる。花は圓錐花序に排列し、小さく初夏に咲き、白色である。果實は球形で熟すれば通常赤色を呈し、誠に奇麗であるから十二月から一月にかけて賞用せられる。

四

葉を新年のお飾りに用ひるゆづりは、山中に自生する常緑喬木である。高さは五六メートルに達し、葉は大形の長楕圓形で、通常二十種位ある。厚く滑かで、裏面は淡白色を帯び、葉柄は赤い。ゆづりは、五月頃綠黄色の細小花が

穂になつて咲く。雌雄異株である。

うらじろの葉も歳首の裝飾に使はれる。暖地に自生する大形の多年生草本である。大なるものは一メートル餘に及び、葉は羽狀に分裂し、上面に鮮綠色にして光澤があり裏面は白色を呈するものでその名がある。春夏の候、顆粒状をなせる子囊を生ずるものである。

だいだいは代々ミ音が通ずるから矢張お正月のお飾りに使はれる。常緑の喬木で、暖地に栽培せられる。高さ三メートル餘に達するものである。葉は互生で卵形を呈し、葉柄に翅を有し、其尖端に關節がある。みかん、なつみかんなどと同じである。梢上葉腋に初夏白色の花を開く。五瓣花である。果實は冬日熟して黄色ミなるが、樹上に止まつて翌年の夏になるミ、増大して再び綠色を帯びるものである。

五

こんぶは子産婦ミもよろこぶミも考へ、お正月のお飾りは勿論、お祝儀に使用せられる。まこんぶ一名こんぶは褐藻類で、陸前金華山より北海道函館の間に生ずる。長さ二メートル位より六メートル位に達し、その幅は三十糎もある長大種である。葉質厚く、革質柔靱である。莖は短く圓

柱狀にして、その下端が分岐して根になつてゐる。こんぶの葉縁は粗き波狀を呈してゐる。北海道西海岸に産する一種いしりこんぶは味美にして細い。

ながこんぶはまたみついしこんぶ、さもいふ。千島より釧路のものをなかこんぶ、さいひ、釧路より室蘭邊迄のものをついしこんぶ、さいふ。葉は狭長なる帶狀をなし黒褐色である。幅は十糎位で、長さは六メートルに達し、縁は多少波狀をなすものである。胞子は専ら一方の面にのみ生ずるさいふ。

六

ふくじゆさうはその名稱が福壽草なるミ、冬開花するミによつて、梅ミ共にお正月の盆栽に珍重せられる。北地に自生するミが多いが、普通に培養する多年生草本である。葉は十糎から十五六糎位に伸び、二回羽狀葉で、その小葉は深裂し、裂片更に亦鋭尖頭なる線狀披針形の小裂片をなすものである。新葉ミ共に花を開くものである。瘦せたものは一莖に一花、肥えたものは分枝數花を開く。萼片は暗紫色を帯び、花瓣は多數である。黄色である。ふくじゆさうはうまのあしがた科の植物である。

すゝせんもお正月から二三月にかけて觀賞せられる。通常觀賞用として庭園に培養せらるゝ多年生草本である。莖は卵狀球形をなし、外皮黒く、下に白色の鬚根を出す。葉は狹長にして線狀を呈し。鈍頭をなす。帯白綠色にして厚い。葉中より高さ二十糎乃至三十糎内外の花莖が出て、莖頂に膜苞があつて數花を出すものである。花は白色で六片に分れ、下は長き筒形をしてゐる。喉口に濃黄色の副冠がある。子房は下位にして、花後通常成熟せぬから果實が出来ない。

七

十二月にもなれば保育室には、火鉢よりストーブなり、またスチームなりが入るから、是等に對する注意を與へるに共に、いろいろ、觀察させるべきことが多い。

火鉢では十能も火箸も、また火ミ灰なごも觀察させ、火鉢が何から出來てゐるかも觀察させるがよい。また火鉢で燃やす木炭の觀察もさせねばならぬ。木炭がどんなになつてゐるか、木炭をいぢるミ手がどんなになるか、木炭で字がかけるとき、木炭が燃えるとき皮がはぢくころがあるこ

こ、木炭に火をおこすときどんなにするか等を觀察させるがよい。更にお庭で落葉を集めて火をつけて燃やし、そのとき生ずる煙、焔等を觀察させるがよい、そして木炭が燃えるときと比較せしめねばならぬ。勿論火いぢりをせぬこみや火鉢に對する注意なごも與へねばならぬ。

ストーブを使用する保育室では、ストーブの觀察を行はしめねばならぬ、そこから石炭を入れるか、そこから灰を出すか、そこから風が入るか、そこから煙が出るか、石炭はどんなものか、木炭がどんなにちがふか等を觀察させ、ストーブに對する注意を喚起せねばならぬ。

スチームで保育室の暖房をなす場合に於ても、スチームの觀察をさせねばならぬ。そして一般に暖房裝置の附近で騒がぬこと、危険なことをなさぬこと等々を注意するに共に、暖房裝置があるときの衛生事項について幼兒の生活を統制せねばならぬ。あまり暖房裝置に近寄らぬこと、暖い室から急に寒い外氣に觸れないこと、しもやけの手足を暖房裝置でぢかに暖めないこと、常に鼻で呼吸すること、鼻孔が塞らぬやうになすこと等、冬の保育室に於ける生活を統制してやらねばならぬ。